

Obscure Memorial

—Thomas Gray “*An Elegy Written in a Country Churchyard*”

をめぐって—

阿 部 卓 也

多形倒錯的とも呼びたい18世紀中葉のイギリス文学の中で、トーマス・グレイは、とりわけ興味深い位置に立っているように思える¹⁾。以下はその「田舎の墓地にて読める哀歌」（以下「哀歌」と略記）をとりあえずの出発点に、そこから広がると読み取れる糸状組織のいくつかの方向にかかわるいささか散漫な覚え書きである²⁾。

グレイはしばしばブレ・ロマン派として位置づけられてきており、またそれを疑問とする議論もすでに数多い。Lonsdale は、「哀歌」の曖昧さのよって来たるゆえんを「まだ」ロマン派ではないグレイの立ち位置に求めている。

なぜグレイは「哀歌」でかくも回りくどくあらねばならなかったのか？ 簡単な説明としては、真に内省的な詩に注目すべき先行者がほとんどないし全く存在せず、かつグレイ自身が保守的な詩人であって、詩の使命は共有された人間の経験に関する基本的な真理を発語することであって、私的な精神的動揺を記述することではないとする時代の命令に従っていたということが言えよう。[……] 徹底した自己の探求は、ロマン派にとっては多かれ少なかれ必須に見えたが、その時代はまだ来ていなかったのである。だがたとえそうであっても、

- 1) 多形倒錯という言葉が「正常な発達」というリニアな物語を呼び寄せてしまうことに注意しなければならないが。
- 2) Thomas Gray “*An Elegy Written in a Country Churchyard*” 以下、Gray のテキストの引用は、原則として The Thomas Gray Archive (University of Oxford) <http://www.thomasgray.org/> 所掲のものによる。

文学において個人的な経験に対する関心が増大していく兆候は現れており、グレイ自身がおそらく決定的な移行の瞬間に位置していたのである³⁾。

あるいはまた、Abrams は、「イートン校遠望」についてだが、こう言っている。

しかしながらわれわれは、意識の自由な流れ、思考と感覚と知覚のディテールの絡み合い、話す声の自然さといった、ロマン派抒情詩を特徴づけるものからはまだ遠くにいる。グレイは自分の観察ならびに省察を、慎重にフォーマルな頌詩の *oratio* の神官のスタイルで描き出している。[……] 記憶も反省も脱個人化され、おもに一般的な命題として現れる。それは金言 *sententiae* (“where ignorance is bliss/’Tis folly to be wise”) として表現されることもあれば、同時代の頌詩のスタンダードな技巧によって、「タブローとアレゴリー」の形に変換された命題として表現されることもある。後者を、コウルリッジは、グレイの「散文的思考の詩的言語への翻訳」と呼んで貶したのであった。グレイの詩は構造の点で創意に富み、その種のものとしては極めてすぐれているが、明らかに世紀中葉の詩にとどまっている⁴⁾。

どちらも、いずれ来るべきロマン派へのリニアな「発展」の線上に、オーガスタンとロマン派の間、未だロマン派であらざるものとしてグレイを位置づけていると言えるだろう。この視点には明らかに一定の発見的な価値、解読格子としての価値はあるが、他面私たちの視野を塞いでしまうものでもありうることに注意しなければならないだろう。

「哀歌」は、おおよそ以下のように分節される⁵⁾。

-
- 3) Lonsdale, Roger. “The Poetry of Thomas Gray: Versions of the Self.” *Thomas Gray’s Elegy Written in a Country Churchyard (Modern Critical Interpretations)*. Ed. Harold Bloom. Chelsea House Pub, 1987. 19-37: 27
 - 4) Abrams, M. H. “Structure and Style in the Greater Romantic Lyric.” *From Sensibility to Romanticism*. Eds. Frederick W. Hilles, and Harold Bloom. New York: Oxford University Press, 1965. 527-60: 538
 - 5) これは概ね Weinbrot の分け方によっているが、論者による大きな違いはない。たと

- 1-28 (sts. 1-7) 導入部。
- 29-44 (sts. 8-11) 話者による貧者の擁護、富も死を避けるには役立たないことの執拗な確認。
- 45-64 (sts. 12-16) 貧しい場合に成功することの困難さについて。
- 65-76 (sts. 17-19) 富める場合、幸運な場合に成功することの危険。
- 77-92 (sts. 20-23) 貧者にも見られるような、何らかの human memorial への普遍的な希求。
- 93-116 (sts. 24-29) Swain の報告。話者が自分の運命／分け前 lot を受け入れたこと。
- 117-28 (sts. 30-32) 墓碑銘。話者が到達した解決が未来に投影される。

イートン MS と呼ばれる初期草稿では、上で「富める場合、幸運な場合に成功することの危険」としたグループの途中、72行のあとに、現在とは異なる4連が続き、人は無名の生活に甘んじるべきであるというあからさまに教育的なアドバイス、話者が自らのために語る教訓で終わっていた。その最後2連を示す。

Hark how the sacred Calm, that broods around
 Bids ev'ry fierce tumultuous Passion cease
 In still small Accents whisp'ring from the Ground
 A grateful Earnest of eternal Peace

No more with Reason & thyself at Strife;
 Give anxious Cares & endless Wishes room
 But thro' the cool sequester'd Vale of Life
 Pursue the silent Tenour of thy Doom.

えば森山泰夫『英米名詩の新しい鑑賞——抒情詩の7つの型』三省堂、1993、264-267なども参照。

批評の多くが後に出版された版のほうをよりよいものと見なしていることは故なしとしない。この草稿では、名声という点では少しも芽の出ない自らを正当化するもの、あるいは友人ウォルポールの一族などに比した自らの出自についての劣等感を逆転し正当化するものとして片付けてしまうことも可能だろう。案に相違して、ホラス・ウォルポールのおかげで「哀歌」は日の目を見、この「哀歌」によってグレイは名声を身に纏うことになる。Williams は草稿のこの結尾を、‘lame conclusion’ であると評しており、また、Hutchings は、「人がいかなる人生を送るかということは、死という主要問題には無関係である。」と切り捨てている⁶⁾。

草稿の無名の人生に足ることを知るべしという教訓めいたものが排され、死後も人に記憶されたいという願望の承認によって置き換えられる。ただし無名性 *obscurity* の称揚自体は最終稿にも残って一つの核心をなしているし、イートン MS と類似の文句も第19連に残されている。Along the cool sequester'd vale of life/They kept the noiseless tenor of their way。死を前にしては、いかなる名声も虚しい (The paths of glory lead but to the grave) という凡庸な警句。古代ローマにあっては「今を愉しめ」を意味したはずの *memento mori* のキリスト教的な転倒の継承。ここには墮落と腐敗の巢窟の都市と清浄な田舎という (ソドムとゴモラ以来の) クリシェも臆面もなく重なり合っている。Sitter はここに18世紀イギリスの「政治からの逃避」を読み取っている⁷⁾。

この、死後も「覚え」られたいという要求、墓地に埋葬されている村人たちと想像的に共有される「一般的な人間の感情」の承認に向かうことで、

6) Williams, Anne. “Elegy Into Lyric: *Elegy Written in a Country Churchyard*.” *Thomas Gray’s Elegy Written in a Country Churchyard (Modern Critical Interpretations)*. Ed. Harold Bloom. Chelsea House Pub, 1987. 101-17: 102; Hutchings, W. “Syntax of Death: Instability in Gray’s *Elegy Written in a Country Churchyard*.” *Thomas Gray’s Elegy Written in a Country Churchyard (Modern Critical Interpretations)*. Ed. Harold Bloom. Chelsea House Pub, 1987. 83-99: 92.

7) Sitter, John. *Literary Loneliness in Mid-Eighteenth-Century England*. Cornell Univ Pr, 1982.

「哀歌」は「キリスト教的ストイシズムの詩から感受性 Sensibility の詩へと書き改められた」と Ian Jack は言っている⁸⁾。

イートン MS では（現世の）処世が焦点化されており、無名（obscure）の生活に甘んじることが推奨されていたのに対して、最終稿では、死後に記憶されることへの欲望が中心的な主題となる。死後に記憶されることを、Hutchings も Williams も、その他多くの論者も、無条件に、人間の「普遍的な」欲望であるとしているのだが、その点は疑ってみるべきかもしれない。むしろこの詩自体、もしくはそのある種の読みが、この欲望が普遍的なものであることを要請しているのではないかと。

Weinbrot は、この詩を「道徳的選択」moral choice の詩であるとして、詩行の進行に伴う代名詞の使い方の変化に注意を向けている。初めの方の詩行では村人たちが they, their で指されている（話者の距離を表わす）のに対して、後の詩行では who, some, our が現れてくることに注目し、話者が自らを村人たちと同一化させていっていると考えている⁹⁾。この同一化の上に、記憶されたいという欲望が普遍的なものとなされることになる。

蛇足ながら、村人たちの生前の営みを想像的に蘇らせる第7連

Oft did the harvest to their sickle yield,
 Their furrow oft the stubborn glebe has broke;
 How jocund did they drive their team afield!
 How bow'd the woods beneath their sturdy stroke! (ll. 25-28)

という詩行は、詩人の創作作業の隠喩として読まれてもよいはずだ。とりわけ、長い時間をかけて作品を彫琢していく 그레이 には相応しい。詩人は語彙

8) Jack, Ian. "Gray's *Elegy* Reconsidered." *From Sensibility to Romanticism: Essays Presented to Frederick a. Pottle*. Eds. Frederick W. Hilles, and Harold Bloom. Oxford Univ Pr, 1965. 139-69: 146

9) Weinbrot, Howard D. "Gray's *Elegy*: A Poem of Moral Choice and Resolution." *Thomas Gray's *Elegy* Written in a Country Churchyard (Modern Critical Interpretations)*. Ed. Harold Bloom. Chelsea House Pub, 1987. 69-82: 26

の team を紙面に afield 放つ。stroke は直示的な用法でもそのまま「筆致」でありうる。これを詩作の隠喩として読むということは、農夫たちの作業と詩人の作業を重ね合わせることができるということだ。もっとも、この4行は、Weinbrot がまだ話者が村人たちから距離を置いていると見なしている部分に属している。

改稿によって、この詩は二つのナラティヴから構成されることになった。第一の語りは無名の村人たちの生と死を顕揚し（第23連まで）、第二の語りは無名の詩人の生と死を記憶する。この詩人の墓碑銘が詩を閉じる。しばしば問題とされてきたのは、この第二の語りで語られている詩人は誰なのか、言い換えれば、第24連に現れる thee とは誰なのか、さらに言い換えれば、墓碑銘が手向けられているのは誰なのか、ということだが、近年の読みは、これを「哀歌」の話者（冒頭4行目に一人称で現れている）自身、あるいはその分身 double、影と見なす方向に収束してきているようである。

Anne Williams は「消え行く〈私〉と、結尾で現れる若者と swain と墓碑銘は、話者が一貫して示している控えめさ、間接性、偽装のパターンの頂点をなすものに他ならない。それらは冒頭行で開始されたプロセスの完成であり、これが抒情詩であること、われわれが相手にしているのが注意深く個人化された（普遍化されてもいるが）——その個人性は自己—消去の奇妙な形式をとってはいるのだが——叙情的話者であることを最後に思い出させる。」と言っている¹⁰⁾。つまり Williams もまたロマン派への途上にグレイを見ており、「哀歌」に抒情詩を見出しているのだが、同時に、この「消え行く〈私〉」に対する着目は、ロマン派的自我へのリニアな歴史観から逸れていくものを含んでいると言えるかもしれない。

「哀歌」が扱う「記憶されたい」欲望に戻れば、そもそも、何をどう記憶されたいのかについても、極めて両価的である。墓碑銘は葬られてある者の功績・長所 merits を問うことも、弱点 frailties を明るみに出すことも禁じ

10) Williams, 上掲書：117

ている。

No farther seek his merits to disclose,
Or draw his frailties from their dread abode, (ll. 125-126)

結局この墓碑銘は、死者を obscure なままに顕揚しているのだ。

山内久明は、kindred がしばしば誤訳されていると指摘している（それは例えば福原隣太郎にも見られる）。kind 親切なではなく、同種の、である、と¹¹⁾。これはただちに ある時期のドイツ美学のキーだった Kongenialität の問題だし、18世紀イギリスの倫理学のキーワードであった sympathy の概念に結びつく問題である。ロンズデイルは言っている。「グレイは自己からの脱出路として受け入れ可能なものを、共感 sympathy の倫理的な中心性という、当時発展しつつあった教義に見出したのだ。」¹²⁾ もちろん、グレイがアダム・スミスを読んでいたかどうかは問題なのではない。（アダム・スミスが中核に同情概念を据えた『道徳感情論』を出版したのは1759年のことである。）同時代の、同じもしくはきわめて近接した言説空間の中に両者がいたということだ。スミスの道徳感情論において社会（共同体）を存立させる要となる「共感（同感）」は、「中立的な観察者」を仮設する。しかしスミスの sympathy とはいかなる概念なのか、ここで改めて瞥見しておくことも無駄ではない。『道徳感情論』の一節を見る。

すべての人はそれぞれ、自分に直接に関係することについては他のどんな人に関係することについてよりも、はるかに深い関心をもつ……かれ自身の幸福は、かれ以外の全世界の幸福よりも、かれにとっては重要であるかもしれない。……しかしかれは、他の人々が自分をどう見ているだろうかということ、意識して、かれらにとっては自分が、どんな点でも他のだれにもまさって

11) 山内久明「イギリス——心の深淵」『ヨーロッパ・ロマン主義を読み直す』岩波書店、1997. 1-119 所収。23-24

12) Lonsdale, 上掲書：26

ない、大衆のなかの一人であるにすぎないことを、知っているのである。もしかれが、中立的な観察者がかれの行動の諸原理にはいりこめる〔同感する〕ように、行為しようとするならば、……かれの自愛心の高慢をくじかなければならないし、それを、他の人びとがついていけるようなものにまで、ひきさげなければならない。この限界のなかでは、かれらは寛大であって、かれが自分の幸福を、どんな他人の幸福よりも切望する……ことをゆるすだろう。(水田洋訳による)¹³⁾

つまり、スミスの「共感」は、凡庸さの要請であり、中庸化の原理なのである。その意味で、「哀歌」が執拗に立ち返る *obscurity* は、この *sympathy* と見事に平仄が合っている。スミスにあっては、自己は社会的な効果であり、むしろ *sympathy* が自己を存立させるのであって、ロマン派的な自我からは隔たっている¹⁴⁾。ここでは「個人的な経験」など信じられてはいないと考えるべきではないのか。

そしてこの時代はまた、カント的な「読者共同体」*Lesepublikum* (の理念)の成立を見た時代(カント『啓蒙とは何か』は1784年刊)でもあった。グレイは読者 *audience* を探す。ハチングズの言うように、「ソネット リチャード・ウェストの死に寄せて」は、読者希求の完璧な悲劇であった。その情緒的な中心は、友人の死によって、グレイが最上の読者を失ったことにある。しかしその詩は、ウェストの死がなければ生まれなかった。「パラドックスは完璧で残酷である」。「哀歌」では、グレイは読者を創出する。しかしそれは話者自らを詩中で殺すことによってである。「閉じてゆく目は誰かの情けの涙を求める」がゆえに、話者は自らにふさわしい読者を創り出す。話者が自らの死を受け入れるとき、読者は彼の「灰の中に、人間の心の火を燃やし続ける役割を担うことになる。このとき読者は、詩人が村人たちに対して立っていた位置に立つ。このロジックは(それが——ハチングズが前提して

13) 水田 洋『アダム・スミス——自由主義とは何か』講談社、1997：62-63

14) このあたり、佐伯 啓思『アダム・スミスの誤算——幻想のグローバル資本主義』PHP 研究所、1999. のスミス読解が参考になる。

いるように——普遍的であるとするならば）今度はわれわれ自身に容赦なく適用されるだろう。われわれ自身が、やがてわれわれ自身のための kindred spirit を必要とすることになる。読者を持ち得ない「ウェストの死に寄せて」は、“in vain”で始まり“in vain”で終わっている。永遠の循環。「哀歌」は詩の内部で読者を創り出す。したがってその循環はソネットとは異なっている¹⁵⁾。

「哀歌」が示唆している死者と生者の連鎖は、カントの言う「潜在的無限」だと見なすことができるかもしれない。つまり、「ある量の測定において、単位の継起的な総合がけっして完結しないこと」¹⁶⁾。このことは、グレイが発見した「崇高」の、カント的な規定と結びつくかもしれない¹⁷⁾。「感性的に与えられるものについての、大きさの情感的判断にあっては、「継起的な総合」つまり「総括」は構想力によって担われる。構想力のはたらきがその「極大」に達して、「端的に大」であるものが顕われるとき、崇高なものが現前する」。無限なものは（直観の対象でも、構想力のとらえうるものでもなく）理性の「理念」にほかならない。そのかぎりにおいて、「自然は、それを直観することが、自然の無限性の理念をとまなっているような自然の諸現象において、崇高なのである」¹⁸⁾。「哀歌」は死にも拘らず、否むしろ死を媒介にしてこそイメージされる潜在的無限を、詩としてのフォルムにかたちづくってみせている。その意味で、この詩は「崇高」なのだと言うこともできるかもしれない。

しかしながら、話はそこでは終わらない。改めて「哀歌」のテキストを見れば、この連鎖は予めきわめて危ういものとして提示されていることに気づく。死後に「記憶」される、というのは、「哀歌」が上演しているシナリオ

15) Hutchings, 上掲書：99

16) Kant *Kritik der reinen Vernunft* A432/B460. カントの崇高論については、熊野純彦『カント——世界の限界を経験することは可能か』日本放送出版協会、2002. も参照。

17) 近代のヨーロッパの「風景の発見」「崇高美の発見」をめぐる観念史的な言説で、グレイ（グランド・シャルトルーズを訪問した際の）がしばしば主人公の一人を演じさせられていることを想起しておこう。たとえば ニコルソン『暗い山と栄光の山』国書刊行会、1994. などを参照。

18) 熊野、上掲書：104-105

に即して考えれば、あまり正確ではない。死者は墓碑銘に「記録」される。白髪の村人は彼を記憶しているかもしれない。しかし彼は墓碑銘を読むことはできない（らしい）。墓碑銘を読むのは、言ってみれば気まぐれに、偶然に (if chance)、立ち寄った kindred spirit である。

If chance, by lonely Contemplation led,
Some kindred spirit shall inquire thy fate,
Haply some hoary-headed swain may say,
‘Oft have we seen him at the peep of dawn (ll. 95-98)

この kindred spirit は、そもそも some が付されて、特定される人物ではないことが示されている。その人物は予め thee のことを知っていたと考えるのが自然かもしれないが、その点も厳密には曖昧である。他動詞として用いられている inquire は、問う者が問われる対象について予め知っていることを保証しないだろう。

死者の生前の姿を制限つきながら生き生きと描き出しているのは墓碑銘ではない。虚構された hoary-headed swain の語りである。しかもこの some swain の登場は、haply という副詞によって導入されている。swain に伴う haply と、kindred spirit に伴う if chance。ここには二重の僥倖が前提されている。つまりこの「潜在的無限」は、きわめて危うい、脆いものである。危うい読者。しかし詩作品は、たまたま、偶然になどと言いつつ、作品の中で否応なく読者を創り出している。狡猾な自己完結というべきだろうか。

「哀歌」が示している、obscure なままに記憶されることという限りなく自己撞着に近い理念は、たんなる死と生の交代、世代の交代という事実、これまた限りなく近い。それが「哀歌」の持つ力の源泉の少なくとも一つであり、この作品の狡知なのかもしれない。

以上はグレイの墓碑銘を読んでウィリアムズやハチングズが（グレイ宛に？）書いた墓碑銘を読んだ私の拙い（“uncouth”）墓碑銘である。

（筆者は関西学院大学商学部准教授）